

もずとすぎの木

小川未明

青空文庫

若い元氣なもすが、風の中をすずめを追いかけてきました。すずめは、死にもの狂いに飛んで、すいと黒くしげったかしの木の中へ下りると、もずはついにその姿を見失ってしまったので、そばの高いすぎの木の頂に下りて止まりました。

「ああ、ばかな骨おり損をしてしまった。」と行って、いまいましように、もずは、くちばしを木の枝でふいていました。

これを聞いたすぎの木は、

「いいことをなさいましたよ。」といいました。もずは、目を光らして、

「私は仕損じてがっかりしているのに、なんでいいことをしたというのですか？」と、すぎの木に向かつて、たずねたのです。

「あのすずめの母親は、病氣なんですよ。そしてあの子すずめは、感心な親思いで、きつと母に食べさせる餌をさがしに出かけたのでしよう。あのすずめが、あなたに捕まったら、病氣の母すずめは、悲しくて死んでしまうにちがいありません。」と、すぎの木は、答えたのでした。

これをきくと、もずは、はじめて、そんな感心な子すずめであったのかと思いました。

「そうですか、それは、いいことをした。もうすこしで私のつめは、あの子すずめの体にさわったのだ。いまごろどんなに驚いていることだろう。まだ、私が、ねらっていると思うだろうから、私は、そんなことを忘れてしまったと知らせるために、唄をうたってやりましょう。」

若い、元気なもずは、すぎの木の頂で、風に吹かれながら、青空に向かって、高い、そして鋭い声で、おもしろそうな唄をうたつたのであります。その声は、遠くまでひびいたのでした。

「ごらんなさい。いままで、方々にきこえていた小鳥たちの声が、あなたの声をきくとぴったりと止まって、静かになつたじやありませんか、みんなあなたを怖れているのです。」と、すぎの木は、いいました。

このとき、木の下の方で、人の声がしました。もずが見ると、かきの木があつて、赤い実がたくさんなっていました。そのそばに、一軒のわら家があつて、六つばかりの女の子が、

「あの鳥は、なんという鳥なの？」と行って、おじいさんに、きいていました。おじいさんは、眼鏡をかけて、日の当たる縁側で二本を見ていられましたが、

「あれは、もずという小鳥だよ。あの鳥は、秋になると、飛んできて、高い木に止まって鳴くのだよ。」と、おつしやいました。

女の子は、じつと木の頂を見えていましたが、

「私は、あの鳥が大好きよ。また来年も、あの木へきて鳴くといいわね。」といつて、ながめていました。

もずは、これまで自分をいやな鳥だとか、乱暴な鳥だとか、いううわさをきいていましたが、いま、このかわいらしい女の子に、好きといわれたので、たいそう機嫌をよくしました。

「すぎの木さん、ここの景色はすばらしいじやありませんか？ 私は、きつとまた来年もやってきますよ。」といいました。

「もずさん、来年といえば、長い間ですが、諸国を飛びまわるあなたは、どうぞ体にお気をつけなさい。」と、すぎの木は、旅をつづける小鳥の身の上を心配していったのです。

「ありがとうございます。あなたの身の上にもしあわせのあるように祈っています。」といつて、もずは、青空を飛んで、どこへか姿を消してしまいました。

いつしか、冬がきて、また春となり、夏が過ぎて、とうとう約東の翌年の秋がめぐつてきました。もずは、山から山へ旅をつづけているうちに、ふと去年のことを思い出しました。

「あのすぎの木は、どうなつたろう？」

そう思うと、つぎからつぎと去年のことが思い出されて、なつかしくなりました。もずは、野原を越して、山を越して、見覚えのある村へと飛んできました。あちらに川があつて、きらきらと金色の日の光に輝いていました。

「去年も、あの川を越したのだな。」と、もずは、思いました。

やがて高いすぎの木が、目に入りました。つづいて赤いかきの木が目に入りました。そのそばにわら家があつて、すべてが去年のままの景色でありました。

もずは、一声高く鳴いて、すぎの木の頂に止まりました。

「ご機嫌よう、すぎの木さん。」

「おお、去年いらしたもずさんですか。」

もずが朗らかに鳴くと、かしの木のしげみの中ですずめは、耳を傾けて、

「みんなここへおいで、私を追いかけたもずがきましたよ。けっして、この木から外へ出

てはいけません。」と、いつしか、親おやすずめとなつたすずめが、子こすずめたちにいいきかせていました。また、下したの家いえでは、

「おじいさん、もずがきましたよ、きつと去年きよねんのもずですわね。」と、女おんなの子こがいつていました。女おんなの子こは、お友ともだちと縁えん側がわで、お人にんぎよう形がたを出だして遊あそんでいました。

「ああ、みんな私わたしを覚おぼえていてくれて、こんなうれしいことはない。」と、もずは喜よろこびました。

「すぎの木きさん、また来らい年ねんもやつてきますよ。」と、やがてもずは、すぎの木きに別わかれを告つげて、飛とんでゆきました。

三年ねんめの秋あきが、めぐつてきたときに、もずはもう年としをとつていました。しかし、もう一度どあのすぎの木きや、子こ供どもを見みたいと思おもいました。彼かれは、野の原はらを越こえ、山やまを越こえてくると、光ひかつた川かわがいつものごとく目めに入はいりました。けれど、どうしたことか、なつかしいすぎの木きや、赤あかい実みのなつたかきの木きをさがしましたけれど、どこにもそれらの姿すがたが見みえませんでした。そしてそこには新あたららしい工こう場じやうが建たち、高たかい煙えん突とつから黒くろい煙けむりが流ながれていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 11」講談社

1977（昭和52）年9月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「小学文学童話」竹村書房

1937（昭和12）年5月

初出：「台湾日日新報」

1937（昭和12）年4月16日

※表題は底本では、「もずとすぎの木《き》」となっています。

※初出時の表題は「百舌と杉の木」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

もずとすぎの木

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>